

# 南アルプス市立豊小学校前期自己評価書

令和4年9月16日（金）

## 1 前期自己評価の経過

- (1) 前期教職員自己評価及び児童対象アンケートの実施（7月）
- (2) 自己評価及びアンケート結果を基にした職員会議及び学年会議にて状況分析と改善方策の検討（8月22日）
- (3) 学校関係者評価委員による自己評価書の検討（9月16日）

## 2 学校評価の分析と改善方策

はじめに

昨年度より、小中一貫教育推進のための取組として、学校評価においても質問項目を統一し、1中学校4小学校が足並みを揃えて目指す児童生徒像の実現に向けた取組を行った。評価項目については、今年度「働き方改革」に関する項目を追加し、24の共通項目と豊小学校独自の質問項目2つ（項目番号④⑤）の26の項目について自己評価を行い、これまでの結果と比較しながら改善の方策を協議するようにしている。

### 〔1〕評価基準

全体傾向を把握するため、【A】【B】評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状態』と判断した。また、【C】【D】評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は、『改善の余地がある状態』と判断した。

### 〔2〕全体的な傾向

上記の評価基準からすると、教職員による自己評価では、26項目のうち24の項目で【A】【B】評価の合計が90%以上の割合になっている。本年度は、教職員の対象を広げたが、評価の平均値を昨年度の前期と比較しても、ほぼ等しい値であった。否定的評価に目を向けると、数値は低いものの12項目において【C】評価の回答があり、分析が必要である。

【A】【B】評価（肯定的評価）についても、【A】評価より【B】評価の多かった3項目については、その理由について分析し、改善のための取組が必要である。

児童アンケートにおいて【A】【B】の合計が80%を超えている項目は、17項目中16項目あり、その内、12項目で90%以上の肯定的評価で、全体的には良好な結果が得られている。しかし、「⑧わたしは、家の人に学校のように話を話している。」では肯定的評価が77.4%と『改善の余地がある状態』であった。また、【C】【D】評価に焦点を当ててみると、その割合が比較的高かったのは、「⑩わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」、「⑬わたしは、本を読んでいる。」、「⑮わたしは、早寝早起きをしている。」の3項目である。満足できる状態であると判断できるが、これまでの取組や次年度との比較において分析しておく必要がある。

### 〔3〕結果の考察

#### (1) 学校経営・組織について

教職員は、個々の能力や経験を生かして相互に協力・理解を図りながら組織的な取組を行うことにより、質の高い教育活動を目指している。校務分掌において、各自が任された業務に積極的に取り組むだけでなく、教職員間において、報告・連絡・相談に努め、協力的な取組を行っており、教職員全員が一丸となって学校教育目標の実現に向かい学校運営に参画しているといえる。また、個々の児童の抱える様々な問題や特別な支援を必要とする児童の増加に対しては、教職員間の意思疎通を図りながら組織的な対応を進めている。

本校の課題の1つである特別支援教育の充実を図るために、「通常学級在籍担当」「不登校担当」「特別支援学級在籍担当」の3人の教職員のコーディネートにより、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関係機関とも連携を図りながら対応してきている。不登校の児童のなかには、外部機関での関わりの中で、少しずつ気持ちが前向きになり、端末を利用したリモート授業に参加意欲をもったり、曜日を決めて登校を促すことで、出席日数が増えてきたりと、よい変化につながってきている。地道な支援を引き続き行っていく。

## (2) 学習指導について

本校では、確かな学力を身につけた子どもを育てるために「豊小学校学びプラン」を作成し、学習規律や学習習慣の定着に取り組んでいる。また、児童間の関わり合いを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

自己評価の結果から、“山梨スタンダード”を意識した授業づくりや、校内研究で取り組んできている授業の進め方を実践していることが結果に表れている。“学習のめあて”を明確化することで見通しをもたせながら学習活動を進め、授業後に振り返りを行うことで学習内容を確認し定着させるという一連の学習の流れが、どの学年でも行われ、自ら学びに向かう姿勢を育てていると想像できる。

児童の回答を見てみると、「⑨わたしは、学校の授業がわかる。」の結果を見ると、91%の児童が日々の学習を理解している様子がわかる。これは「⑩わたしは、自分の考えをもって、他の人の話を聞いている。」や「⑫わたしは家に帰ってから勉強をしている。」の結果を反映しているものだと考えられる。「学級力向上プロジェクト」や「家庭学習がんばろう週間」等の取組をPDCAサイクルにより、計画的に行ってきた成果であろう。

また、昨年度は『改善の余地がある』状態であった「⑪わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」の結果は、83%（昨年度73.3%）と改善傾向が見られた。学び合いのある授業づくりは、重点をおいて取り組んできたことであり、感染症対策を講じる必要性に迫られながらも、教師による発問（問い返し）やペアやグループといった学習形態の活用、ICTを利用した意見交換など、児童の学習を深める取組を進めてきた結果であると考えられる。読書に関する「⑬わたしは、本を読んでいる。」の結果は、82.8%（昨年度79.2%）と改善傾向にはあるが、まだ成果が見られたとは言いきれない。読書指導や親子読書の推進等の取組は継続しているものの、感染症対策から本の貸し借りの時間について制約を受けている点が影響していると考えられる。

## (3) 生徒指導・生活指導について

生徒指導を充実させていくには、日頃から学級・学年経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係や児童相互の好ましい人間関係を育てることが大切である。

本校では、適切な児童理解と児童間の人間関係づくり（「Simple」プログラム）によって、個々の児童の「心の居場所」づくりと自己肯定感を高める指導の充実を図っている。児童数の変化で1学級当たりの人数が多い学年もあるが、「⑭児童理解のためにコミュニケーションを図っている。」や「⑮諸問題の早期発見・早期対応に努めている。」「⑯特別支援教育理念を理解し、個に応じた関わりをしている。」等において良好な結果が見られる。

教職員個々の思いとしては、「朝の健康チェックや課題・提出物の確認、授業準備に追われ、コミュニケーションをとる時間がとれない。」という意見があった。「あいさつ」については、あいさつ運動に関して、もっと組織的な取組を求める意見もあった。本校には、単級で児童数の多い学級や課題を抱えている児童が多く在籍する学級がある。また、

コロナ禍でイレギュラーな対応が増えている。学級担任一人で抱え込まず、チーム豊として全職員で指導・支援していけるよう努めていくことが大切である。

児童アンケートでも「①学校が楽しい。」「③困ったことがあったら相談できる友達がいる。」「④困ったことがあったら相談できる先生がいる。」において肯定的評価の割合が高くなっている。

昨年度、注視していく必要性を指摘された「③困ったことがあったら相談できる先生がいる。」については、「いない」を選択した児童が 5.9%（昨年度 8.3%）いた。困ったことがあった時に相談できる友達の存在を含め、今後も、気になる児童への声かけを積極的に行っていく必要がある。学年別に見ると1年生とクラス替えのあった3年生、5年生の割合が他の学年より高くなっている。Q-U検査やいじめアンケートの結果からも学級の状態や児童の様子を捉え、学習面や生活面で取り残されることがないように手立てを講じていく。

携帯電話に関する児童アンケートによると、「⑰自分の携帯電話・スマートフォンを持っている。」児童は学校全体では45%と昨年度より38ポイント増えている。所有率を学年別にみると、1年生：35%、2年生：56%（1年時36%）、3年生：31%（2年時18%）、4年生：36%（3年時24%）、5年生：53%（4年時34%）、6年生：58%（5年時50%）、と学年が上がるにつれて所有率が高くなり、高学年では半数以上が持っていた。所有している中で、ルールが決められている割合は84%と昨年度の同時期（76%）より高くなっている。学校においても1学期に5年生を対象に「スマホSNS出前授業」を行ったり、一人1台端末を利用する際のルールや約束事を確認したりと、機会があるごとに情報モラル教育に力を入れている。教職員はさらに指導力を高めていくとともに、家庭への啓発も引き続き行っていく必要がある。

橿形中学校区で共通した取組である「橿形スタンダード」の項目に関して、アンケート結果を見ると、「⑦わたしは、げた箱のくつをそろえている。」では、肯定的評価が90%以上となっている。学級や学年、児童会で継続して取り組んできている成果であると思われる。また、「⑭わたしは、自分からあいさつをしている。」についても、肯定的評価は88.3%で、半数以上（54%）が「よくしている」と回答した。「⑥わたしは、無言清掃をしている」においても、肯定的評価が87.9%と『満足できる状態』ではあった。「あいさつ」と「無言清掃」の取組については、児童会活動の柱にも掲げられているので、子どもたちが主体となった活動が繰り広げられるような工夫を考えていきたい。

#### （4）保護者・地域との連携について

本校では、養蚕指導、切子指導、水泳指導、合唱指導、学習支援等において、地域住民や学校関係者の支援を受けてきた。また、早朝作業（愛校作業）や運動会への協力など、保護者の力を借り、教育活動を行ってきた。

自己評価における「⑳教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っている」については、今年度も、【C】評価があり、平均値も低くなっている。これは、新型コロナウイルス感染症の影響により、支援を受けづらく、充実した教育活動の機会が失われていることが原因であると推測される。教育活動がもとに戻りつつある中であって、外部講師を復活させる取組は進めている。今年度は3年ぶりにプールを開設したことから、「いきいき教育地域人材活用推進事業」を活用し、水泳の授業に、外部講師を招き、水泳指導を行っていただくことができた。

まだまだ感染症対策を行っていかねばならない状況がある。コロナ禍以前の「これまでの教育」が見えなくなってきたおり、「これまで」の地域の教育力が再開できるように資料や文書等の記録を整理しておかなければならない。

## (5) 小中一貫教育について

今年度から正式に“橿形中学校区小中一貫校”として、橿形地区の小中学校がスタートした。それぞれの学校が特色を生かしながらも一貫校として共通の教育課題やその改善策に等について理解を図り、9年間というスパンで児童生徒を育成していくことをねらいとしている。

共通項目である「㉔深い学びになるよう、課題や発問の工夫をしている。」についての評価は、肯定的評価が若干90%に届かなかった。学習支援を主とする教職員を評価者に加えたことが、その理由であると考えるが、100%に近付けたい項目である。組織的に研究することや教材研究をする時間を確保することが解決策につながる。今後も、前年度までの実践等を活用したり、校内研究によって積み上げてきた実践を活かしたりしながら授業づくり（授業改善）を進めていく。橿形中学校区5校による拡大校内研究会が計画されており、他校の実践も参考にしたい。前年度までのデータ等を整理し、利用することで校務にあたる時間の減少を図ることも、研究時間の確保につながると思う。

## (6) その他

「㉔民主的で規律ある学級（学年・学校）集団作りを行っている。」については、肯定的評価が95%であったが、100%でないことから担任が理想とするように集団作りが行えていない実態があることが分かった。「学級力向上プロジェクト」を通して、学級の課題や改善策を児童と一緒に考えたり、「豊小学校学びプラン」を拠り所に規律について確認したりする取組を推進していく。また、複数の教員で指導体制を構築しながら学校として望ましい集団作りを行っている。

「㉔諸表簿や文書、記録媒体を適切に管理・活用」については、県の校務支援が導入され、機微情報（内部文書）に関するセキュリティが高められた。「外部系」と「校務系（内部）」をきちんと使い分け、情報管理を適切に行っていく。

今年度新たに設けた「㉔働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいる。」については肯定的評価が96%であったが、【A】評価は29%であった。日々の時間外勤務については、記録されデータ化されている。数値として「見える化」されたことにより、時間外勤務が月45時間を超えるとPC上で通知が出されるようになった。また、山梨県教育委員会は「令和4年度末までに時間外在校等時間（勤務時間）が月80時間を超える教職員をゼロとする。」という目標を掲げた。豊小学校では、現段階において目標は達成できていない。数字だけ減っても、仕事を持ち帰っていたのでは、業務改善につながったとは言えず、難しい局面を迎えている。本年度は、校務支援システムが新しくなったことから、システムを理解し運用できるようになることも業務の一部となった。保護者や地域住民に理解を得ながら、新型コロナウイルス感染症への対策をきっかけに、行事の精選（再編成）を進めるとともに教員の意識改革を進めていく。

これからも「信頼と笑顔、創意工夫して未来をつくる教師」として「たくましく 心豊かな 子どもの育成」を目指し教育活動に取り組んでいきたい。